

ごみを荒らされてお困りのときは

シリーズ「ごみ減量をいかにして成功させるか」④

ごみを出すときに、カラスなどの小動物によってごみ袋が荒らされて困っていませんか。市は、カラスなどによるごみの散乱被害を防ぐため、5世帯以上での使用を条件に、ごみ出し用ネットを配布します。

【問】市生活環境課リサイクル推進係（☎88・8933）

家庭ごみ出し用ネットを無料配布

ごみ出し用ネットを使うと、カラスによるごみ荒らし被害はもちろん、雨風による資源物の散乱を防ぐことができます。また、5世帯以上で使うため、ごみを家の前に出すときと比べて、ごみ袋が点々と出されることを防ぎ、地区の景観や環境保全につながります。

●申請方法 市生活環境課や市公式サイトなどで配布する申込用紙に記入し、同課リサイクル推進係へ直接提出

●申請要件 次の要件、全てを満たすこと ▶5世帯以上で使用する世帯の代表者名、住所を届け出▶利用場所が現在の収集ルート上にあること ※生活環境課と協議後決定します。

●ネットの大きさ 2m×3m程度 ※燃やすすしくないごみ袋(大)が15袋ほど入ります。

重りなどは各集積所で準備してください。集積所1カ所につき1枚配布。※予算の範囲内での配布となります。



家庭ごみ出し用ネット

6月の可燃ごみの量

柳川市 1187トン	みやま市 399トン
---------------	---------------

6月の市内の可燃ごみの量は1187トン（前年同月1233トン、46トン減）。みやま市の可燃ごみの量は399トン（前年同月499トン、100トン減）でした。

3～6月の可燃ごみの割合

柳川市 74%	みやま市 26%
------------	-------------



ごみ分別アプリ

古紙リサイクルにご協力を

3月から5月に事業所から排出された両市のごみ量は、柳川市865トンでした。

事業活動でよく出るものと言えばダンボールや雑誌、個人情報が入った機密書類などの古紙類。古紙は燃やすすしくないごみとして出さずに、分別してリサイクルへのご協力をお願いします。

市は、ダンボールや雑誌などの古紙類を無料で搬入することができる事業所を「柳川市古紙回収協力店」として現在4社が登録しています。また、個人情報等が記載された大量の機密書類を安全に資源化できる協力店もあります（有料）。紙類の分別は処理経費の節約につながり、シュレッターにかける時間を削減でき事務効率化につながります。個人の持ち込みも可能です。詳しくは市公式サイトを確認してください。



ごみ出し協力店

よくあるお問い合わせ

Q プラスチックやペットボトルを直接持ち込むことができる施設はありますか？

A プラスチック類とペットボトルは指定袋に入れて、柳川商事（筑紫町397-1、三橋町久末130-1）へ持ち込んでください。紙類など資源物も受け入れることができます。

●受付日時 ▶月～金曜＝午前8時30分～午後4時 ▶土曜＝午前8時30分～午後3時

柳川とっておき歴史の話ー立花宗茂外伝ー第12回

【問】市観光課観光推進係（☎77・8563）

島津軍から立花宗茂を救った内田耆岐入道

九死に一生——立花宗茂にとって生涯、最大の危機といえ、天正14（1586）年7月末、北上

する島津軍（主将・島津忠長）を、筑前立花城（現・福岡市東区、糟

屋郡新宮町と久山町にまたがる）で迎え討ったときかもしれません。

このおり、宗茂の命で敵陣に赴き、時間稼ぎしたのが家臣の内田

耆岐入道（鎮家）でした。彼の家は代々、大友家の重臣・戸次氏に仕えていた家柄です。

一説によると、先祖の一族はもととも肥後国人吉（現・熊本県人吉市）の領主・相良氏の庶流の出で、肥後山鹿郡内田（現・熊本県山鹿市）を領していたとも。

耆岐は宗茂の義父・戸次（立花）道雪に、「ぜひに」と見込まれ、宗茂に付けられて天正年間（1573～1592）、に立花城へ入りました。

さて、島津軍です。彼らは宗茂の実父・高橋紹運が守る岩屋城（現・太宰府市）を猛攻し、ついには落城させました。紹運は家臣、

城と運命を共にし、果てます。享年39。

そして最後の標的としたのが、宗茂が籠る立花城でした。

この時、島津征伐のため大軍を発した羽柴秀吉（この年の9月、豊臣に改姓）は、まだ九州に上陸していません。

宗茂は起死回生を賭け、島津軍の総攻撃を少しでも引き延ばそうと、偽りの降伏を申し出る使者を立てることにしました。

この時、この決死の役目を帯びて敵陣へ乗り込んだのが、耆岐だったのです。

のらりくらりと、籠城方が開城を引き延ばすうちに、秀吉の援軍が関門海峡に到達。

その来援を知った耆岐は、「これまでの話は、すべて時を稼ぐための偽りであった。わが使命は達せられた。さあ、斬れ」と、その謀を堂々と、島津忠長に明らかにしたのです。

騙されのを知った島津の兵は、立ち、耆岐を殺そうとします。

が、忠長の判断は違いました。自らの生命を犠牲にしてまで、主家を守る耆岐は忠臣である。逆に彼を称えた忠長は、馬や脇差まで与え、警固の兵まで付けて、耆岐を宗茂の許に送り返したのです。

こうして立花家を救った耆岐でしたが、彼の後半生には、さらなる苦難が待ち受けていました。

慶長5（1600）年9月の関ヶ



立花城址（現在も残る石垣）

原の戦い——西軍に与した宗茂が改易されると、耆岐は他家へ仕えることなく、筑前国内に隠棲。宗茂の再起を信じて、元和5（1619）年に世を去っています。享年は不詳。

その後、柳河に復帰した宗茂は、耆岐の次男・連久を召し出して、耆岐の労に報いました。

文Ⅱ加来耕三（つづく）